

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	夏目漱石についてのイギリス
Author(s)	スーザン マグラス,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1994 : 87 - 91
Issue Date	1995-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039362
Right	
Relation	



夏目漱石にとってのイギリス

スーザン マッグラス

日本において20世紀で最も有名な作家は夏目漱石といわれている。この時代の初めに、イギリスの生活を経験していた漱石は当時の文学の先駆者といえる。彼のイギリスと英文学の関係は、特別なので、なぜ英文学を勉強することを決めたか、イギリスに行った時どんな感動を受けたか、西洋の生活は、彼の作品にどんな影響を与えたかということの研究しようと思う。そしてこの論文の中で、漱石が受けた教育の歴史と、イギリスの経験と、書いた文学のことを調査するつもりだ。

漱石が受けた教育の歴史

明治時代、日本中が西洋に注目していた中、西洋の影響に対して漱石は他の人とは違う意見を持っていた。彼は西洋の近代化を取り入れた上で、日本人の考え方や日本文化は捨てないほうがいいと考えていた。また、大学に入学する前に、英語への興味はあまりなかった。漱石が中学校に通っていた時代は、教育には二つの種類があった。一つは、伝統的な学校で漢文学を重視していた。もう一つは、西洋の影響を受けて、英語を重視して設立された学校であった。しかし、漱石は、英語に対してあまりいい感情を持っていなかったため、伝統的な学校を選んだ。その時代は、漢文学に興味を持っていたのであった。

では、どんな風に漱石は、英文学に興味を感じるようになったのであろうか。その理由は二つあると思う。まず初めに、兄の大一のすすめが考えられる。彼は、金え助にこれからの時代は漢文学より英語やらなければならないと言った。次には、友人米山保三郎のすすめが考えられる。金え助は、建築をやっても日本人にはとてもセント。ポルズ寺院の有名名ものは建て等れない、それより文学をやれと言われた。そこで、金え助は英文学を選ぶことにした。そして、1883年

(2)

に英語を研究することに決めた。その年の9月、東京大学の英文科に入学した。

しかしながら、英文学の担当であるディクソン先生の指導は彼をがっかりさせ、英語と英文学に対する興味はほとんどなくなってしまった。その後、松山の中学校で英語教師をしていたが、1900年、文部省から奨学金を受けて、英語を勉強するためにイギリスへ渡った。しかし、英語は漱石の希望ではなく、英文学をやってもよいと言うことを確かめた後、この留学を承知した。たぶん、イギリスの経験は、漱石に大きな影響を与えたであろう。

漱石のイギリスでの経験

イギリスから帰国後、漱石は作家になった。よって、イギリスでの生活は漱石になんらかの文学的な影響を与えたと思われる。その影響を探るためには、日常生活の調査が大切であると思う。なぜ彼の留学経験は成功しなかったのか、また、どのように漱石の考え方が西洋での生活に影響されたのか、考えてみたい。

最初は、金銭的な問題があった。文部省に資金を買ったけれど、ケンブリッジかオックスフォードで勉強するためには足らなかった。イギリスに着いてから、ケンブリッジ大学のアンドルズ先生を訪ねることにした。しかし当時のケンブリッジ大学は、英文学の研究のための日本からの留学生にとって、都合のよい条件を必ずしも備えていなかった。学科組織としての英文学科は制度化されていなかったし、もし漱石が留学を希望したとしても、その受け入れが果してうまく行ったかどうかわからない。結果的には、ケンブリッジやオックスフォードは、学費も高い上、学生生活を維持していくだけでも大変で、奨学金ではとうていまかない切れないものと判断して、ケンブリッジでの留学を断念した。

そして、ロンドン大学の授業を取り始めることにした。実際、金銭面以外でも、漱石にとってロンドンには留学場所として望ましい場所であった。なぜなら、「一、ロンドンは社会が大きい、二、芝居を観るのに都合がよい、三、古本屋や出版社などが多い」(1)からである。ロンドン大学では、初めに、中世英語文

学を専門とするケア先生の授業に出た。しかし、その先生の考え方に不満を感じ、かわりに、紹介されたシェイクスピア学者のクレイグ先生の自宅での個人教授けることにした。このクレイグ先生との出会いは漱石のロンドン留学の中で幸せな出来事であった。

もう一つ問題は、大学を止めたために、知的な話をする人と知り合う機会がなかったことである。また、お金も少なかったので、社交的にもできなかった。イギリス社会に属さなかったので、イギリス人や西洋的な生活に対してもよく思わなかった。アイランド出身のクレイグ先生も、イギリス人と英文学を批判的に見ており、よく二人で文学的なことにイギリス人が理解がないことについて話していた。二人はイギリス人の文学的な態度に失望していた。

漱石の劣等意識。

そのように、漱石はイギリスの生活と英文学の研究に不満を感じていたため、精神的に弱くなった。そんな一般的な失望の感情以外に、イギリスへ出かける前にも、イギリス人や西洋の社会にとって劣等意識を持っていた。例えば、横浜からイギリスまでの船で、とても優美なイギリス婦人と乗り合わせたと漱石は書いた。姿や話し方にき気品のある印象を受けていたのに、英語が分りにくかったから、これから劣等感を持ったようになった。

また、滞在中に劣等を感じさせる条件もあった。ヴィクトリア女王が死んだ時に、漱石は葬列を見に行った。ほとんどのイギリス人は背が高いから、彼は何も見えなかった。そして下宿の主人の肩に上がらせられた。漱石の気持ちは悪かったであろう。他にも例えば、ある日公園で散歩していたら、中国人と間違えられた。公園のベンチに座っていた婦人が二人、漱石を見て「Least poor Chinese」と言った。中国の歴史に英風を持つ漱石は、この話を喜ばなかった。

それで、イギリスで不満を感じていたため、研究に集中してみた。しかし、それも役に立たなかった。英文学の研究に失望したため、新しい方法を見つけて

(4)

みたいと考えていた。池田という科学者と話し合ったが、文学研究に科学的な方法を試みた。「このイギリスでは、伝統的に歴史的な研究が主流であり、文学批評は主観的な審美主義とか印象主義であって、新しい研究方法など思いも及ばない状態であった」(2)と漱石は書いた。そして心理学から社会学などあらゆる方面の材料を収集する作業に取り掛かった。しかし、文学は主観的なものであり、そんな方法は無理であろう。この失敗のため、漱石の精神状態はだんだん悪くなっていた。

またイギリスでの滞在は利益はあり得なかったと漱石自身が考えていた。「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間において狼に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を嘗みたり」(3)と思わせるものであったが、むしろそれは、大部分漱石自身の一方的な思い込み、ないしは被害妄想にすぎなかった。また、その生活は、いうまでもなく否定的な感情ばかりではなかった。彼はイギリスの文明や人々の偉大さや長所をも、同時に理解したのであって、決してイギリスを嫌悪ばかりしていたのではなかった。

漱石の作品でのイギリスの影響を与えられた実例

帰国してから、書いた作品でイギリスの経験の影響を与えられた実例がよく出る。特別なテーマは個人主義だ。漱石の作品で個人主義と伝統的な行為の戦いについて書いてあった。最初は、「坊っちゃん」という小説での人物は、この小説を通じてそういう問題を解決できなかった。教師として坊っちゃんは、ある日学校で宿直の順番があったけれど、やりたくなかったので、校長と議論した。それで、坊っちゃんは個人主義的な行為を表したことになる。また、「こころ」でも個人主義は大切なテーマであると思う。例えば、先生やKは自分の生き方を通すために親類や家族を見捨てて、東京で新しい生活を試みた。そのように、一方では忠孝礼節の伝統を捨てていたけれど、個人主義が伝統的な考え方より決定したにすぐれたかどうか、漱石は決められなかった。これと同じように「坊っちゃん」では、坊っちゃんは、本の終で校長との議論に勝ったが、教師をやめさせられた。そして東京で助手として働いた。しかし読者は彼が幸せだったかどうか、よく分らない。

漱石の全作品の中には、このような個人主義と伝統的な価値の戦いの要素がある。結局、漱石はイギリスでは必ずしも体験を楽しめなかったが、その後の作品では、彼がイギリスで経験したことから受けた影響の例が多く見られる。また、漱石が書いた「私の個人主義」では、留学のメリットについてたくさんのことを述べている。彼の執筆活動の上で、イギリスでの滞在は彼の視野を広げたのではないだろうか。

<注>

- (1) 出口保夫、「ロンドン漱石文学散歩」 旺文社 1986
- (2) 出口保夫、「ロンドンの漱石」河出書房新社 1992
- (3) 矢本貞幹、「夏目漱石、その英文学的側面」研究社出版 1971